『一橋大学附属図書館研究開発室年報』
第 6 号　2018 年

【報告】

平成 28 年度～30 年度文部科学省共通政策課題（文化的・学術的な資料等の保存等）「西洋古典資料保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」の 2 年間を終えて

鈴木　宏子
（一橋大学学術・図書部長兼学術情報課長）

1.　はじめに

一橋大学社会科学古典資料センターと附属図書館は、平成 28（2016）年度～30（2018）年度の 3 年間において、文部科学省共通政策課題（文化的・学術的な資料等の保存等）について概算要求を獲得し「西洋古典資料保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」（以下、本事業）を開始した。本報告では、主に平成 28（2016）～29（2017）年度の中間報告を行うとともに、本事業実施において見えてきた資料保存と人材育成の意義、今後の課題について述べるものとする。

2.　一橋大学社会科学古典資料センターについて

明治以降わが国では、西洋の学問や思想を積極的に取り入れ研究を進めてきたが、一橋大学（以下、本学）は、わが国では唯一無二ともいえる西洋古典資料の大コレクションを構築してきた。その中には、ロンドン大学のゴールドスミス文庫、ハーヴァード大学のクレス文庫、コロンビア大学のセリグマン文庫と並んで社会科学分野の世界 4 大文庫のひとつに挙げられるメンガー文庫（大正 11（1922）年収蔵）のほか、ギールケ文庫（大正 10（1921）年収蔵）、フランクリン文庫（昭和 49（1974）年収蔵）、など世界的な大文庫が数多く含まれる。これらの貴重な古典を集中管理し、社会科学研究者の高度な研究に資するために、一橋大学社会科学古典資料センター（以下、古典資料センター）は昭和 53（1978）年に附属図書館から独立し、西洋古典資料に特化した国内で唯一の貴重書図書館および研究機関として設立された。

平成 7（1995）年には、カール・メンガー文庫マイクロフィルム化・目録改訂・保存事業を契機として、保存修復工房（以下、工房）が古典資料センター内に設置された。工房では、保存修復の専門スタッフ（以下、工房スタッフ）4 名を中心に古典資料センター所

蔵資料の保存修復作業、貴重書庫の保存環境整備を進めている。これらの実績と経験を踏まえて、西洋社会科学古典研究、西洋書誌学、西洋社会科学古典資料の保存・管理を中心に講義を行う西洋社会科学古典資料講習会を昭和 55（1980）年から、併せて保存・修復に関する実技指導を含む西洋古典資料保存講習会を平成 12（2000）年から開催しており、国内で唯一の公的な研修機関としての機能も果たしてきている。これまで（平成 30（2018）年 1 月現在）に、西洋社会科学古典資料講習会は 36 回開催され延べ 1,000 人以上、西洋古典資料保存講習会は 17 回開催され、延べ 170 人以上の修了者をそれぞれ輩出している。

3.　概算要求申請の経緯

3.1　申請の背景

古典資料センターのこのような実績を元に、文部科学省共通政策課題（文化的・学術的な資料等の保存等）について概算要求を申請し、本事業を実施することとなったが、その背景について記しておくために、これまでの運営について振り返ることとする。

工房の運営は、平成 7（1995）年の開設当初より、一橋大学後援会などの財政的援助を得て、文庫単位の保存修復計画を途切れなく継続することで維持されてきた。本学では、わが国の社会科学の教育研究の雄として世界に誇るコレクションを持つワールドクラスの大学であろうとしてきた自負があり、それにこたえる形で一橋大学後援会とそのバックである同窓会組織からの長年の支援をいただいていた。しかし、法人化以降の運営費交付金の年々の減少、機能強化戦略への重点化などの要因から、保存修復事業は平成 28 年度以降の後援会支援をいただくことが難しい状況となった。概算要求は、この後援会支援に代わるものとして申請し採択されたものである。

3.2　申請の主旨

上記の経緯のように、本事業の当初の目的は、後援会寄付事業として計画された一般貴重書の保存対策の新たな財源の確保であった。しかし、本学資料だけの修復では文科省予算の獲得は難しい。そこで、保存修復の専門家である専門助手や工房スタッフの知識と技術を全国の大学図書館職員まで広めることを考えた。先に述べたように、古典資料センターでは長年にわたり二つの講習会を実施し、全国の人材育成に貢献してきた。しかし、両講習会とも 3 日間の日程で開催されるもので、この短い日程では受講者の習熟度や各図書館での活用状況は測りがたく、講習は受けても日常業務で継続的に実施しないとなかなか

身につかないという声もあった。それを補い実効性を高めるために、本事業では、1～2 か月（当初計画では 3～6 か月）の長期実務研修を計画した。実務研修においては、毎日工房スタッフと共に保存修復に関する OJT を行い、実務研修生（以下、研修生）にしっかりと知識と技術を身につけてもらう、そしてそれを各図書館あるいは各地域に持ち帰っていただき、全国的な底上げを行う。さらに、古典資料センターを中心に研修生同士を結び付けることで、保存に関する全国的ネットワークを構築する。このような流れで、本事業計画は出来上がった。

各大学図書館の状況で最も懸念されたのは、保存に関する知識や技術の継承であった。各館で貴重書を担当してきたベテラン職員の多くは定年退職を迎えている。そして、大学図書館では人員の削減および委託等が進む一方、今まで以上に研究支援、教育支援等、新たなニーズに対する人材の育成も必要である。その中で、資料保存という分野に割ける人や時間や予算は、減り続けているのが実情である。このような状況の中で古典資料センターの保存に関する知識と技術と経験をもって、各図書館だけでは維持の難しい保存分野の人材育成に資することは、本学にふさわしい貢献であると思われた。

次に次章から、本事業の 2 年間の実施報告を行う。

右：本事業概要資料
（古典資料センターWeb サイト（参考文献 13）に掲載）

4.　H28（2016）年度事業

4.1　実務研修（4 名）

本事業は、まずは実務研修が主たる柱である。しかし先に述べたように、全国の大学図書館では人員不足、業務委託および新たなニーズへの対応という課題を抱えている。難しい状況下で実務研修に人を出してもらうために、西洋古典資料を所蔵するいくつかの大学に本事業の説明に行き、勧誘活動を行った。その中で真っ先に手が挙がったのは、国立国会図書館であった。ご承知の様に国立国会図書館は、保存課という独立した部門を有し、保存に関してしっかりした体制を整えていることが知られているが、西洋古典資料に特化

した技術を習得したいという理由で、約 1 か月弱の間、保存課職員が実務研修を行った。いうまでもなくわが国の図書館の中で中核的な役割を果たしている国立国会図書館からの研修参加ということで、本事業のグレードアップに貢献していただいたと思っている。また、最初の実務研修例として、長期の実務研修カリキュラム作成にもご協力いただいた。国立国会図書館にとっても有益な研修となったようで、当該研修生はこの翌年、本人の希望により 2 回目の研修も受けている。

左：実務研修の様子
（古典資料センターWeb サイト（参考文献 13）に掲載）

これを皮切りに、平成 28 年度は北海道大学附属図書館（H28 年 10 月）、慶應義塾大学三田メディアセンター（H28 年 11-12 月）、大阪大学附属図書館（H29 年 1-3 月）の計 4 名の研修生を受け入れた。それぞれの研修生は、研修修了後は自館に戻り館内勉強会の実施や自館の広報媒体を通しての成果報告などを行っており、一定の成果を挙げることができた。先に述べたように、実務研修で技術を習得するには研修期間が 3〜6 か月必要であるというのが、工房スタッフの当初の意見であった。しかし、大学図書館がおかれた厳しい状況から、それだけの長期にわたり職員を派遣できる大学は皆無であった。そこで、期間を概ね 1〜2 か月に縮小することとし、その短い期間で各館のニーズを十分に取り込んだ研修カリキュラムを構成することとした。そのため実務研修の派遣元の図書館へ事前に出向き、その図書館の保存状況を調査見学しながら、研修予定者、管理職と面談を行い、各館の要望を取り入れたカリキュラムを作成するというスタイルが確立された。この過程の中で印象に残っているのは、慶應義塾大学の管理職の方から発せられた、修復技術を学びに行かせるというよりは、資料保存のマネジメントをできる人材を育てたい、という言葉であった。

資料保存のマネジメント能力とは、例えば資料の状態からどのような措置を施せばよいかの判断ができ、保存環境についても専門的な知識を持ち、展示公開での活用もできる等、総合的な管理能力を言う。技術の習得つまり手仕事は、その研修生一代で終わる可能性がある。しかし、保存のためのマネジメント能力は、実務研修の成果を各館に合わせてカスタマイズし継承していくことができる。このお話を元に、これ以降、各館が職員派遣を検討していただく際には、このような観点を加味し有効かつ各館で持続可能なスキルを継承できることを念頭に説明を行った。

4.2　ネットワーク形成（シンポジウム等）

本事業の活動を全国的にアピールし、資料保存に関する関心を呼び起こすため、以下のワークショップ、シンポジウム等を開催し、西洋古典資料の保存およびそれを支える人材育成の現状と課題について、広く問題提起と情報共有を図った。

①　国際ワークショップ「Rare Materials, digitization, and the role of curators（貴重資料・デジタル化・キュレータの役割）」　来場者 46 名

平成 28 年 2 月 12 日（金）　於：一橋大学附属図書館会議室

講演：

1) ピップ・ウィルコックス（オックスフォード大学ボドリアン図書館）
‘The element they lived in: special collections, scholarship, and scale’

2) 床井啓太郎（一橋大学社会科学古典資料センター）
「一橋大学社会科学古典資料センターにおける西洋古典資料の保存と修復：これまでと今後の展望」

国立情報学研究所の共同研究との共催として本事業のプレイベントと位置づけて開催した。海外から有識者を招聘し、デジタル化も含めた海外の動向について講演をいただき、古典資料センターからもこれまでと今後の展望を発信した。特にこれらの事業を担う人材としてキュレータ（学芸員・図書館員）育成がテーマの一つとなった。

②　平成 28 年度文化的・学術的資料の保存シンポジウム「書物の構成要素としての紙について～本の分析学」　来場者　104 名

平成 29 年 2 月 15 日（水）　於：一橋大学如水会百周年記念インテリジェントホール

講演：

1) 吉川也志保（一橋大学言語社会研究科）「洋書の紙質と本の寿命について」
2) 宍倉佐敏（女子美術大学）「洋紙の原材料を観察する」
3) 加藤雅人（東京文化財研究所）「『モノ』が持つ情報とその保全～科学・技術の限界～」
4) 全体討論　コーディネーター・江夏由樹（帝京大学）

「本の分析学」と題し、主に紙の保存に関する専門家から講演をいただいた。参加者募集の段階から想定（50 名程度）を超える申し込みがあり急きょ会場を変更することとなり、このテーマに関する関心の高さが覗われた。全体討論でも多数の質問が寄せられ活気あるシンポジウムとなった。

5.　H29（2017）年度事業

5.1　実務研修（4 名）

前年に続き国立国会図書館から前年受講者が 2 回目の研修（H29 年 5 月）を行った。続いて、九州大学附属図書館（H29 年 6-7 月）、東北大学附属図書館（H29 年 9-11 月）、一橋大学附属図書館（H29 年 1-3 月）の実務研修を実施した。このうち、九州大学では新図書館への移転のため貴重書の移動が喫緊の課題となっていた。また東北大学では古典資料の組織的な保存計画の再構築を進めているところであった。いずれも課題に対しタイムリーで最適な研修であったとの評価をいただいている。また、東北大学の実務研修では、3 か月の間に、一定期間の研修の後、自館に戻り本来業務を行い、再度研修に来るというスタイルで、自館の業務の空白を埋める工夫もなされた。

5.2　ネットワーク形成（シンポジウム等）

①　シンポジウムの開催

平成 29 年度文化的・学術的資料の保存シンポジウム「本の分析学 II　本の革」

2017 年 12 月 22 日（金）　一橋大学兼松講堂　　参加者 118 名

10：30～11：30　　工房見学会

13：00～13：50　　実務研修受講者報告会

14：10～17：10　　シンポジウム

講演：

1) 宝山大喜（東京都立皮革技術センター）「革のできるまでと特性」

2) 岡本幸治（製本家・書籍修復家）「本の革の魅力と悩み」

3) 討論・質疑応答　宝山大喜、岡本幸治、吉村圭司（東京都立皮革技術センター）

前年に続き「本の分析学」と題し、本の革を取り上げた。皮革技術の専門家を講師にお呼びし、革の特性についての講演およびディスカッションを行った。シンポジウムに先立ち、古典資料センターの工房の見学会、実務研修受講者報告会を実施した。工房見学会は、収容人数の制限から先着 15 名としたが、早々に定員となり、見学会でも熱心な質問があった。実務研修受講者報告会では、1 名の報告発表の後、研修生全員が壇上に集まりそれぞれ成果報告を行った。実務研修はそれぞれ別個に実施されたため、研修生同士が顔を合わせる初めての機会となり、今後のネットワーク、連携についてディスカッションを行った。

左：シンポジウム講演風景（岡本氏）　　右：工房見学会の様子

② 図書館総合展ポスターセッションへの出展

図書館総合展は、毎年パシフィコ横浜にて開催され、国内の各種図書館および情報関連産業等の関係者が一堂に会する 3 日間にわたるイベントである。例年入場者数は 3 万人を超える。ここに本事業の成果として、ポスターを出展し来場者に事業の説明を行った。

図書館総合展への出展は初めてであったが、図書館のみならず美術館、資料館等様々な業種の方々の関心も得ることができ、古典資料センターと本事業の良いアピールになった。

左：第 19 回図書館総合展に出展したポスター

6.　2 年間のまとめと所感

6.1　本学にとっての意義

古典資料センターは、国内唯一の西洋古典資料に特化した工房を持つ図書館および研究機関として、他には無い強みを持つ存在である。それを活かして、講習会を長年実施するなど、その知識と技術の伝搬に努めてきた。しかし、近年の図書館を取り巻く環境や図書館そのものの機能の変化等を考えると、このままでは資料保存について共に協力すべき図書館も人材も回りに居なくなってしまうのではないかという危惧がある。そのような観点から、今ここで全国の人材を育成しておくことは、古典資料センターにとって協力者を育てるという意味で重要なことであったと思う。全国的な人材育成は、実は本学にとっても、いや本学にこそ必要とされるものであった。

6.2　研修生の今後の活躍への期待

また、図書館職員の人材育成という観点からは、各派遣元の図書館におかれては本事業の研修生を今後も専門的知識を身につけた人材として活用していただくことを願っている。当然、人事異動があり若手であればなおさら様々な業務の経験は欠かせないが、それでも、各機関内あるいは各地域で資料保存に関する活躍の場を得て、さらにその能力を伸ばしていただきたいと思う。

6.3　平成 30（2018）年度および今後の事業

そのためにも、ネットワークの形成とその継続を念頭に置いて、最後の平成 30 年度事業を進めたい。本学と研修生同士が情報交換をできるメーリングリストや SNS を立ち上げ、派遣元機関の図書館のバックアップをいただきネットワークを作る。そこから協力して、各地域のニーズに合わせた講習会やワークショップに発展させることを想定している。また、全国的なアンケート形式の保存状況調査も今後予定している。本事業そのものは、文科省の概算要求予算終了後、どのような形で継続するかが課題となるが、このネットワークを基盤として、全国的な資料保存の底上げを継続していくことが次の目標である。

6.4　大学図書館における保存修復

保存修復については、全資料を一巡すれば完了というものではなく、その間に新たに経年劣化が生じた資料への対応が発生することを考えると、終わりのない事業ともいえる。しかし、今回、今まで工房内でのみ継承されてきた知識と技術を学内外の研修生へと継承していく土台が作られたことと、プロの修復家、製本家には及ばないものの、その土台に保存のためのマネジメント人材という種を植え付けることができたことは、大きな収穫であった。終わりのない事業だからこそ、多くの人々が協力していく必要がある。さらに、ここで培った種が図書館の中だけにとどまらず、広く文化的資料を保有する例えば美術館、博物館といった機関へと繋がっていくことも期待している。フィールドが広がることにより、図書館が保有する文化的学術的資料の存在が高まりその価値も広く周知され、そのような資料を所蔵する大学の名声も高まるものと考えている。

7.　おわりに

まずは、本事業に貴重な人材を派遣いただいた研修生派遣元大学の方々にお礼を申し上

げたい。どこの大学図書館でも人員が不足し、中長期の研修に職員を派遣できないことは想像に難くない。その中で長期的な視点で資料の保存を考え、そのための人材育成に資源を投入するご英断をいただいたことに深く感謝する。同時に、今回の派遣は叶わなかった大学図書館の方々にもこの成果を共有し、ネットワークにご協力いただくことを願っている。本事業が全国の大学図書館等のより良い保存環境を構築する一助となれば幸いである。

参考文献

[1] 岩本 吉弘. メンガー文庫事業のこと (1) 業者選定まで. 一橋大学社会科学古典資料センター年報. 31 号, 2011, p.1-24. (DOI 10.15057/19033)
[2] 岩本 吉弘. メンガー文庫事業のこと（2）全体計画の策定へ. 一橋大学社会科学古典資料センター年報. 32 号, 2012, p.1-13. (DOI 10.15057/22892)
[3] 岩本 吉弘. メンガー文庫事業のこと（3）：原資料の保存をめぐって. 一橋大学社会科学古典資料センター年報. 34 号, 2014, p.25-40. (DOI 10.15057/26551)
[4] 岩本 吉弘. メンガー文庫事業のこと（4）：原資料の保存をめぐって（続）. 一橋大学社会科学古典資料センター年報. 35 号, 2015, p.72-94. (DOI 10.15057/27326)
[5] 岩本 吉弘. メンガー文庫事業のこと（5）：原資料保存のために. 一橋大学社会科学古典資料センター年報. 36 号, 2016, p.14-25. (DOI 10.15057/27812)
[6] 石井 健. 古典資料センターのこと. 一橋大学社会科学古典資料センター年報. 37 号, 2017, p.26-36. (DOI 10.15057/28596)
[7] 床井 啓太郎. 貴重資料の保存環境整備について. 一橋大学社会科学古典資料センター年報. 32 号, 2012, p.14-19. (DOI 10.15057/22893)
[8] 増田 勝彦. 岡本 幸治. 床井 啓太郎. 西洋古典資料の組織的保存のために. 一橋大学社会科学古典資料センターStudy Series. 64, 2010, p.1-48. (DOI 10.15057/18610)
[9] 床井 啓太郎. 西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業. カレントアウェアネス-E. E1846 No.312, 2016.10.06 http://current.ndl.go.jp/e1846 （accessed 2018-02-27）
[10] 床井 啓太郎. 西洋古典資料の保存. 大学図書館研究. 106, 2017, p.36-46. (DOI 10.20722/jcul.1496)
[11] 床井 啓太郎. 「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」について (特集 トピックスで追う図書館とその周辺). 図書館雑誌. 111（2）, 2017, p.86-87.
[12] 床井 啓太郎. 西洋古典資料の媒体変換と原資料の保存 ：一橋大学社会科学古典資料センターの事例から. 月刊 IM = Journal of image & information management. 2017(7), 2017. p.4-7
[13] 一橋大学社会科学古典資料センター「保存実務研修」（西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業） http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/training.html （accessed 2018-02-27）
＊ 上記 Web サイトには、本事業の概要、研修生の報告書、シンポジウム等の記録が掲載されている。
[14] 倉持 隆. カルテを使った資料保存 －西洋古典資料保存実務研修報告－. 知識の花弁 三田メディアセンターだより. No.9 2017 p.8-9.

http://www.mita.lib.keio.ac.jp/guide/publication/j7aliq0000000rli-att/chishikinokaben2017spring.pdf
（accessed 2018-02-27）
15. 由利　江里子.　職員レポート　西洋古典資料保存実務研修に参加して.　大阪大学図書館報.　51 巻 1 号, 2017　p.4-5.
https://www.library.osaka-u.ac.jp/incl/publish/kanpou/191.pdf　（accessed 2018-02-27）

[Report]

2016-2018 MEXT's common policy issues (preservation of cultural and academic materials, etc.) "Bases and network construction for preserving Western classical materials" : at the end of the 2nd year of the 3 years project.

Suzuki, Hiroko.
Head & Manager, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information, Hitotsubashi University